

## 伊 吹 武 彦

京大大学院（新制）仏文科の雑誌を出そうという話が去年あたりからはじまり、その後寄りよりに相談をかさねていきましたが、いよいよ一応の形を整え、実現の運びに立到りました。

現在のところ、京大仏文では修士コースに十九名、博士コースに十一名が在籍しております。本来ならば、これら全部の学生が研究成果を発表すべきなものでありますが、紙数の都合があり——悲しいことに、こういう場合にはいつも経済の問題がつきまといます——学生同士、互譲の精神によつて六分の一の五名が執筆したにすぎません。残る二十数名の論文は、次号から順を追つて掲載されるであります。

大正の末、「仏蘭西文学研究」という季刊誌が東京で発行されました。私自身のことを申して恐縮ですが、私はその第一号に、恩師辰野先生の命により「アロイジュス・ベルトランの芸術」という一篇を執筆しました。冷汗の出るような思いでしたが、しかしそれでも、精いつばい書いたものが活字になるのは、何となくうれしかつたことを今も忘れないでいます。こんど『フランシア』に執筆した諸君も、幾分の冷汗と幾分よろこびを肌と心中に感じていることでしょう。冷汗はせいぜい流すほうがよく、生みのよろこびはできるだけ多く味わいたいものです。

最後に、この号をお読みいただく方々に申しあげます。執筆者はいずれも、いまだ研究の入り口にいるものばかりで、未熟不備の点は多々あるかと存じますが、しかしそれぞれが、それぞれの仕方で作るかぎりの努力をしています点をお認めいただければ幸であります。それぞれ自分の好みの題目を選んだわけでありますが、その結果は、時代的にも方法的にもかなり変化に富むものとなりましたことも、あわせてお認め下さつた上、よろしく御批判御指導いただきますよう、執筆者に代つてお願申しあげます次第であります。